

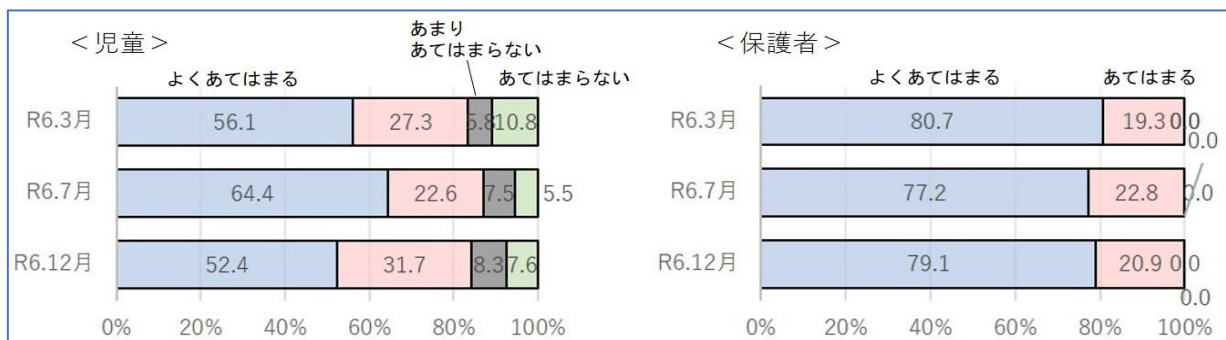


11日(水)の人権集会では自分のよさについて考えました。集会では、見方によって自分の短所は長所になることを学びました。この「自分には、よいところがある」という気持ちを自己肯定感といいます。20日(金)の学校運営協議会でも話題になり、先日の自慢大会のような、自分をアピールする場、児童会活動や縦割り活動など子どもが活躍する場の大切さを再確認しました。

そして、何よりも、その自己肯定感を支えているのが、私たち大人です。

「素敵ね。」のひと言で

11月に実施した「学習・生活に関するアンケート」を集計すると、「自分には、よいところがある」という質問項目について、次のような結果が得られました。



児童の肯定的回答はやや減少していますが、注目してほしいのは保護者の方の回答です。保護者の方は、ご自身の子どもに対し、直近の3回とも全員が肯定的に回答しています。子どものよいところを見つけ、ほめる。自己肯定感を育てるために大人ができる、最も大切なことです。

ひとつ、お話を紹介します。

幼稚園の“ふみのりくん”は、みんながかわいい猫の絵を描いた時、一人だけ画用紙いっぱいを3色に塗りつぶし、鉛筆か何かで細かい線を無数に描いていたそうです。

先生は、ふみのりくんに「猫ちゃんの絵は難しかった？」と尋ねました。ふみのりくんは、自信たっぷりに、「ううん。この紙が小さくて入らなかった。」と答えました。

ふみのりくんは、モデルとなった猫を誰よりも長い時間触り、そのもふもふの手触りを表現したかった。その結果、全体像が画用紙に入りきらなかったのだそうです。

先生は、ふみのりくんの話を聞き、「素敵ね。」とほめ、みんなの絵と一緒に壁に飾りました。

こうして、人とはちがった感性を認められながら成長した“ふみのりくん”は、NHK交響楽団の特別コンサートマスターを務める、日本を代表するヴァイオリニスト・篠崎史紀となりました。

見方を変えればよさになる。子どもたちも、子どもたちを見る私たち大人も心しておきたいことです。

「。」(マル)で終わります。

さて、若い人は、チャットやLINEなどに句点の「。」(マル)をつけて返されると、「冷たい」「返信を拒絶されている」と感じるそうで、文末は絵文字・顔文字にするのだとか。

それでも、「サラダ記念日」で知られる俵万智さんは、言葉を見つめて、次の歌を詠みました。

優しさにひとつ気がつく ×でなく○で必ず終わる日本語

保護者の方のたくさんの温かい支えと、子どもたちのがんばりや優しい姿に支えられてきました。ですから、その様子をお伝えしてきた『磨光』も、やはり「。」で終わりたいと思います。

1年間、ありがとうございました。どうぞよいお年をお迎えください。